

機関番号：14501
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20530852
 研究課題名（和文）社会的自立の基盤形成を中軸に据えた「人生設計型学校カリキュラム」の構成と展開
 研究課題名（英文）Theory and Practice of Life-Planning Oriented School Curriculum for Children's Social Independence

研究代表者 今谷 順重（IMATANI NOBUSHIGE）
 神戸大学・人間発達環境学研究科・教授
 研究者番号：60093639

研究成果の概要（和文）：職業は、一人ひとりの人生において重要な位置を占めており、人は働くことの喜びを通じて生きがいを感じ、社会とのつながりを実感することができる。このためこれからの学校教育においては、子どもに的確な職業観・勤労観や職業に関する知識・技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力や態度をはぐくむための教育の充実に努めることが重要である。そしてこの理念を実現することが、人生設計型学校カリキュラムの目標である。

研究成果の概要（英文）：The occupation of an individual is important in anyone's life. The pleasure of working gives people a reason to live and also to realize their connection with society. In this reason, it is important to enhance the education system and ensure that children develop the knowledge and skills related to work or labor, while keeping in mind their personalities and abilities or attitudes to subjectively select the direction of their lives. To realize this idea is the purpose of our life- planning oriented school curriculum for children's social independence.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,800,000	540,000	2340,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,500,000

研究分野：教科教育

科研費の分科・細目：教科教育学

キーワード：学校カリキュラム、市民性教育、キャリア教育、人生設計能力、キー・コンピテンシー

1. 研究開始当初の背景

今日の子どもたちの人間性（人間力・社会力）や社会性（社会力）の発達は、「幼児性の肥大化」「社会化異変」「摩擦回避世代」「自己チュー児」等の言葉が示す通り、急激な社会変化の中で、大きな問題状況に直面しているといわなければならない。

また最近では、小学校1年生の児童にみら

れる「小1プロブレム」、中学校1年生にみられる「中1ギャップ」、高校生にみられる「17才問題」といった社会性の低下・衰退現象が、子どもたちの社会的な成長・発達の歪みやひずみを顕著に表わす典型的な教育問題として注目されている。

2. 研究の目的

このような傾向は、単に日本だけの問題で

はなく、世界共通にみられる現象であるということが出来る。最近のアメリカやイギリスやカナダやオーストラリアのシティズンシップ教育をはじめ、それをさらに深め発展させる形で EU やユネスコや OECD で推進されようとしている新しいシティズンシップ教育・キャリア教育の潮流等、今日の世界の市民性教育改革の新しい動きの全体像は、一人ひとりの子どもたちの、人間として市民・職業人・生活者としての成長・発達の可能性を全面的に引き出し開花させていくことによって、それを社会全体・人類全体のより良い進歩・発展・向上のためのエネルギーとしていこうとする、「ヒューマン・デベロップメント」の理論と実践の、具体化への取り組みとしてとらえることができる。

本研究の目的は、申請者が提唱する、子どもたちの「人間的・社会的・職業的自立」を支援することのできる「人生設計型・能力開花型・社会参画型学校カリキュラム」の理論と実践のあり方について、明らかにしていくことである。

3. 研究方法

申請者が自分の研究室に設立したグローバル・コラボレーション・システムとしての「国際市民性教育推進ネットワーク」の機能を最大限に有効活用して、国内はもちろん諸外国の研究者や実践者たちと意見交換しながら、理論仮説の有効性を具体的な教育実践によって検証する中で、21世紀の地球社会のたくましい担い手としてのアクティブ・ヒューマン・シティズンシップを形成していくことのできる、ポスト産業化社会・知識基盤型社会にふさわしい新しいタイプの学校カリキュラムを確立していきたい。

4. 研究成果

(1) 海外の研究者と意見交流を行うため、2008年度には、アメリカ・ワシントン州立大学から Walter Parker 教授と Carol Coe 博士を、2009年度には6月にアメリカ・オハイオ州立大学の Mery Merryfield 教授と博士課程の学生1名を、さらに11月には、オーストラリアのメルボルン・モナシュ大学の Libby Tudball 上級講師とスウェーデン・ストックホルム大学の Ann Kjellberg 教授を、2010年度には、イギリス・ロンドン大学の Bryony Hoskins 上級講師とノルウェー教育省の Lars Nerdrum 博士を招聘して、第3回から第6回までの「国際市民性教育推進ネットワーク・セミナー」を神戸大学において開催した。

また申請者自らは、2008年度には、イギリス・ケンブリッジ大学で開催された国際市民性教育会議 (Citiz.Ed International Conference)、ブルガリアの首都ソフィアで開催された第10回ヨーロッパ市民性教育会議 (NECE Conference) へ参加、アメリカ・タウソン大学とニューヨーク・コロンビア大学

での資料収集を行った。また2009年度は、リトアニアの首都ビリュニスで開催された第11回ヨーロッパ市民性教育会議へ参加、2010年度は、韓国・ソウル・漢陽大学でのアジア・太平洋多文化教育学会への参加、スペイン・マドリードの教育・文化施設の訪問、イタリア・トリエステで開催された第12回ヨーロッパ市民性教育会議に参加した。

(2) 日本の子どもたちの学習意欲や学力が低下してきている原因は、現在の学校は、将来子どもたちが実社会に出たときに自立的な生活者として生きていくうえで困ることがないようにするための、彼らの人間的・社会的・職業的自立を支える実際的な生活能力を育成することが不十分である点にある。どの子どもも、その子が社会に出たときに自らの特性を生かし、自分の力で主体的に学び働き生きていくための準備を進めていくことができる教育こそが、いま求められているのである。こうしたキャリア形成・進路選択意識の乏しさが、社会に出ても現実の課題や困難・挫折に的確に対応していくことができない、ニート・フリーター・引きこもり問題を深刻化させているといえよう。

そこで一番不足しているものは、知的な面では、単なる知識の暗記ではなく、現実の生活の中に課題を見つけ出し、自ら進んで学び考え判断・行動しながら問題をよりよく解決していくことのできる実践的な能力である。また、それらを自らの人間形成へと知・情・意・体の総合化・統合化を図っていく力や、他者に共感したりコミュニケーションをとったり、情報を集めて議論したりして、積極的な人間関係を構築していく社会的スキルと対話的・協同的な相互行為・相互作用能力である。

(3) 最近ヨーロッパ連合 (EU) が展開している「アクティブ・シティズンシップのための教育」の特徴は、①民族と文化の多元主義に基づく共同空間建設の必要性についての幅広い知識・教養の獲得、②具体的な経済的・政治的・文化的統合に向けて、ヨーロッパ市民意識を実践に移していくことのできる活動的・積極的な「市民性」の形成、③職業訓練による能力開発の重視と、職業能力・就業能力の強化による、青少年の社会的・経済的自立の支援と青少年失業問題の解消といった3つにまとめられる。

(4) OECD の PISA 調査においても、キー・コンピテンシーという新しい学力概念を提示して、内容的には、政治的な視点に加えて、経済的地位・経済的生産性・知的資源・社会的ネットワーク (社会関連資本)・個人の健康と安全・個人的満足と価値志向における自主性など、キャリア形成的資質・能力の育成についての重要性が強調されている点が注目される。

(5) また最近、世界の市民性教育の新潮流の1つとなってきた、国連・ユネスコが推進する「持続可能な開発のための教育（ESD）」は、2005年から2014年をその運動期間に定め、世界的な規模で研究開発と教育実践を展開している。そこでは、教育・学習は、「環境と開発の問題を解決する意識や価値観・能力を身につけ、意思決定への効果的な市民参加を実現するために重要である」との基本的立場から、世界中の子どもたちが、「持続可能な未来及び積極的な社会の変換のために必要な価値観や行動、生活様式を学習する」ことをめざしている。

(6) ここで目指されている21世紀型の新しい学校カリキュラムと教育実践の姿は、単に学校の中だけでしか通用しない受験型学力の形成ではなく、生涯にわたる各ライフステージの多様な職業的・市民的状况において、生活の充足感を増大させていくことのできるホリスティックな全人的能力の育成である。そしてそれは、人生設計能力を育てる人生設計型・能力開花型・社会参画型学校カリキュラムとでもいふべきものであり、ヒューマン・デベロップメント（人間発達・自己形成）の視座に立って自立的なホールパーソン（全体的存在としての人間）としての市民・生活者を形成すべく、ホール・ライフ・トレーニング（調和のとれた全人的生活能力・学習能力）を提供・育成していくことをめざすホール・カリキュラム（子どもたちの社会的自立と自己成長を中軸として、社会的自立基盤形成領域を核に、各教科が人間形成に対するより緻密な相互補完関係を確立していく体系的教育課程）の確立である。そしてそれは、子どもたちの社会的自立と自己成長を支援する観点から、「将来の職業や生活への見通しを考えるなど、学ぶことや働くこと、生きることの尊さを実感させる教育の充実」を強調している点に、大きな特色がある。

(7) それではこのような要素を、我が国の学校カリキュラムの中にどのように取り入れていけばよいであろうか。そのひとつは、総合的な学習の時間の学習内容体系の改善である。現在の4事例・3課題（国際化・情報化・高齢化・環境問題・学校地域の問題・自分自身の問題）を中心とした内容構成は、各学年・各単元間の連続性や発展性のとらえ方が不十分であり、個別的単元のバラバラな学習で終わっているように感じられる。これらの学習内容間の全体性・構構性・一貫性をより一層高めていくための中心軸として、自己認識・自己成長・自己形成軸が不可欠となる。

このような考え方のヒントは、現在の生活科における「自分への気づき」の中に見られる。そこでは、「一人ひとりが、以前の自分より向上し、成長したことに気づくことを大

切にする必要がある。それは、児童が自分自身をよりよく理解し、自分のよさや可能性についての気づきを深め、そのことによって生活することへの意欲や自信を一層高めることにつながるからである」と述べている。

この観点は、平成20年版小学校学習指導要領生活編において、目標3という形で新たに付け加えられ、これまで以上に強調されるようになっているが、3年から6年までの総合的な学習では、それがどのように継続的・体系的に発展させられようとしているのかが不明確になっている。

(8) EU その他今日の欧米の国々のシティズンシップ教育に大きな影響を与えたイギリスのワールド・スタディーズでは、個人やグループのエンパワーメントや自立を重視する「人間の可能性パラダイム」の考え方を提唱して、「外へ向かう旅・内へ向かう旅」という観点から、「外への旅は内への旅であり、2つの旅は相互に補完しあい、照らしあうものなのです」と述べている点が注目される。「適切な教育と人格の全体的な成長のためには、カリキュラムとその構造、エトス（精神）は、どのように変わるべきでしょうか。また教育・学習のスタイルはどう変わるべきでしょうか」

「自分の能力と可能性を全体的なものとしてとらえること一身体・感情・知性・精神の4つが、同等で相互補完的なものとなったとき、私たちの真の能力が最高に発揮されます。こうした考えを基本として、学習者は自分の能力を活用したり、伸ばしていくための場を与えられ、そのことを通じてエンパワーされ、自律的な生き方を獲得するべきです」

「セルフ・エスティーム＝自尊感情、セルフ・イメージ＝自己イメージと学習能力との関係については、現在の知能テストの得点よりも、自己認識の在り方の方が、適切な指標となることを実証しました。自己認識が高まると、認知的な学習能力も高まる、今日の学校に存在する多くの問題の根底には、『貧しい自己イメージ』があると述べています」

「人々が自分の可能性に気づき、それを十分活かせるようになることで、世界のシステムは変えられる」「有機生物体をパーツに分けるのではなく、統合された存在ととらえ、それぞれの自立志向性と、より大きなシステムへの統合志向性とが相互性・補完性を持つことで、生物の可能性が最大となります」「人間は純粋に知性だけでは、個人として成長することはできません。気持がともない、そのために行動パターンを変えてこそ、本当の成長・変化が生じます」（グラハム・パイク他著『地球市民を育む学習』明石書店 1997）

ここでは、人間の内的可能性を豊かに表出・開花させていく上で、自己認識・セルフイメージ・自己効力感を高めていくことがき

わめて重要であるとともに、人間を部分や要素に分けて捉えるのではなく、知・情・意・体が相互補完的に一体となって目的達成に向けて機能するとき、個人の潜在能力が最大限に発揮されるようになることが指摘されている。

(9)このような観点からすると、アメリカの人間中心カリキュラムでは、低学年において、「私について」「私たちの生活舞台としての地球」「人間の基本的欲求と衣食住」「人間の成長と知識・文化の獲得」といった単元を設定して、日本の生活科でめざしているような自分への気づきを育てようとしているのが興味深い。同じくアメリカの中学校教科書『ティーン・ガイド』は、人間関係、家族、住生活、資源の4部から構成されており、第1部の人間関係では、①一人しかいない自分・大勢の中の一人、②心身の変化、③あなたは自分自身をどう思いますか、④人はあなたをどう見ているのでしょうか、⑤見かけと内面、⑥大人になること、⑦友達、⑧男の子と女の子、⑨人々を援助する職業について学習する。

わが国でも、NHKの「ようこそ先輩・課外授業」で綾小路公麻呂氏に、小学校6年生の子どもたちがそれぞれの人生相談を持ちかけ、その内容をユーモアのある漫談風の文章にまとめて保護者たちに披露するという興味深い授業が行われていた。同じく「どんな大人になりたいか」では、本田総一郎や岡本太郎などの生涯をたどりながら、小学校6年生が将来の「なりたい自分」について夢や希望を語り合う番組があったり、西本弘子先生の「2分の1成人式」の授業では、小学校4年生の子どもたちが、これまでの10年間の自分の成長を振り返り、自分ができるようになったことや得意なことをみんなの前で発表し合う活動が行われた。

(10)このような、自分さがし・自分づくりの旅としての自己形成的な学びは、単に内容的な観点からだけではなく、自分らしさを探り見つけ出していくことのできる、学習方法や評価方法としても効果的に組み込んでいくことが大切である。また、国際化や情報化や高齢化や環境問題等の4事例3課題を取り上げる場合にも、子どもたちが実在する働き方のキャリアモデルや生き方のロールモデルと出会い、将来なりたい大人やつきたい仕事と結び付けて、地域人・国際人・環境人・健康人・職業人・高齢者・消費者等種々の具体的な社会的立場や役割の観点から、問題解決の在り方を提案し行動に移していくような形の学習も体系的に取り入れていきたい。さらに、学校外での社会体験活動やボランティア活動に取り組んでみることを通して、自分のよさや可能性・自分らしさをよりよく発揮していくことのできる働き方や暮らし方や生き方とのかかわりの中で、各人が総合的な

学習の各テーマをより深く実践的に掘り下げ、なりたい自分・つきたい仕事・実現したい夢や理想や希望や憧れ、形成したい人生観・価値観・世界観についての洞察やイメージを一層具体的なものへと発展させて行くことも大切である。

中学校・高等学校へと進むにつれて、思春期の自己確立の課題に直面する生徒が、各教科・科目における学習の進展に応じて興味・関心を抱いたり、自分自身の進路について具体的に考えたりする中で、知識・技能の深化・総合化を図り、今をより充実して生きることができるようになるための学習課題の位置づけは、総合的な学習においてその重要性が一層高まってくる。したがって、このように生涯にわたって学ぶこととよりよく働き生きることを結びつけて考えられるようにする上で、4事例3課題について単に政治的・経済的・社会的側面から扱うだけではなく、子どもたち自身の自己形成やキャリア発達や進路意識・職業観の形成の観点からも考察することは、極めて重要であり有意義なことである。しかし残念ながら、このような観点から総合的な学習のカリキュラム内容を体系化・構造化していくという発想は必ずしも十分とはいえず、各単元が個別的に位置付けられている傾向が強いので、人生設計型・能力開花型・社会参画型学校カリキュラムとしての各テーマの連続性・一貫性・体系性をより一層充実させていく必要がある。

(11)また、このような形で総合的な学習を充実させていく方法に加えて、①各教科における活用型の学習場面において進路意識や職業観の形成と関連付けていく方法、②さらに社会科や理科や家庭科や道徳・特別活動等を中心にクロス型の横断的・関連的指導という形で実施していく場合や、③それを総合的な学習や職場体験活動・社会体験活動・ボランティア活動等とダイナミックに連携させていく方法など、申請者が提唱している「21世紀の活動的な地球市民」「たくましく心豊かな生活者」を育成していくための「探究のタペストリー」の方法論（①問いのウェビング型自己組織化、②知識のネットワーク型・クロス型成長、③価値観・規範意識の明確化と発展、④学習活動と社会参画への実践的スキル、⑤学びの対話性・関係性・協同性と開かれたコラボレーション、⑥子どもをとらえる構え・個を活かす手立て、⑦自己開発と社会形成による将来計画・人生設計への子どもの成長の見取りとリフレクション）に基づいたいくつかのタイプが考えられるが、これらの「人間の可能性パラダイム」の理論を具体化していくための全体的枠組みについては、場所を改めてさらに考察を深めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 今谷順重「各教科・領域等の内容改善のポイントは何か—『生活』の内容改善」『教職研修』平成 20 年 3 月号、40—41 頁、2008 年
- ② 今谷順重「藤原孝章著『シミュレーション教材・ひょうたん島問題』」全国社会科教育学会『社会科研究』第 69 号、73—74 頁、2008 年
- ③ 今谷順重「小・中学校各教科の評価のポイントと対応上の留意点—小学校『生活』の評価の留意点」『教職研修』平成 22 年 8 月号、38—39 頁、2009 年
- ④ 今谷順重「唐木清志著「アメリカ公民教育におけるサービスラーニング」全国社会科教育学会『社会科研究』第 73 号、54—55 頁、2010 年

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 4 件)

- ① 原野明編著『学校管理必携・新学習指導要領ハンドブック』(共著)、教育開発研究所、(全 221 頁)、2008 年
- ② 今谷順重「体験活動の充実をどう進めるか」高階玲治編著『中教審「学習指導要領の改善」答申』(共著)、68—70 頁、教育開発研究所、(全 242 頁)、2008 年
- ③ 今谷順重「中学校『公民的分野』」日本公民教育学会編『公民教育事典』(共著)、216—217 頁、第一学習社(全 270 頁)、2009 年
- ④ 今谷順重編著『人生設計能力を育てる社会科授業』黎明書房(全 233 頁)、2009 年

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今谷 順重 (IMATANI NOBUSHIGE)

神戸大学・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：60093639

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者